

## 成果報告書

### 川根本町指定課題 「魅力あるグルメ（食）・土産・特産品で町の魅力アップ」に関する研究

静岡大学 農学部 藤本ゼミ  
指導教員：准教授 藤本穰彦

参加学生：吉田美音子、荒木智遥、小林純也、榊原拓海、杉山喜一、中山峻弥、飯島大、江頭泰寛、小木曾郁弥、小楠邦彦、伊藤江里、川治明以、神澤清、小山ほなみ、杉村直柔、鈴木碧人、角田航輝、田中沙奈、原川麻友、藤來知世、三島真希、水谷新、湯澤孝哉

#### 1. 要約

「農と食をむすぶ地域づくり」を主題として、フィールドワークで得られた内容をSNS情報として、加工、発信する取り組みを行った。住民と学生がローカルな食を共に見直すきっかけとなればと考えた。参加学生は、農村資源計画学を履修する農学部学生22名とティーチングアシスタントの大学院生の合計23名である。学生たちはチームを編成し、川根本町の住民の皆さんと川根本町の食の世界を探検した。プロジェクト共通のハッシュタグとして「#かわねのne」を考案し、さらにチーム名をハッシュタグとして設定した（「#ゆずのいいとこゆずっちゃお」、「#チームBIG」、「#川根ポッポー」、「#川根いいものがち勢」、「#かわ姉さんやんばいです」）。収集した記録はSNS情報として加工し、現在も流通を続けている。

#### 2. 研究の目的

日本で最も美しい村連合の加盟村である川根本町では、住民主体の美食革命が期待されている。本研究では、川根本町の食の魅力アップのために、食と農をつなぐ最も美しい町づくりをすすめる住民主体の形成とネットワーキングを目的とする。参加学生は、地域内連携や美食の発掘、食べ物と食べ方の町内交流をコーディネートし、美食革命を担う地域主体の創生を、SNS情報の発信を行いながら促していく。

#### 3. 研究の内容

川根本町は、日本で最も美しい村連合の加盟村である。世界基準の村づくりを宣言している同町における美食革命もまた世界基準が求められる。町内の日常食を、生産者と調理者の視点から見直す機会を学生がコーディネートすることで、町内の食の地域資源（これまでの地域資源磨きの遺産の発掘を含む）を見つめなおすことから出発したい。グルメや特産品開発のためには、その持続的な担い手の存在が必須であり、町内に持続的な美食革命を担う主体を形成することが、一先ずの到達点となる。そのために、SNSツールを活用した情報発信とネットワーキングを社会実験する。

#### 4. 研究の成果

##### (1) 当初の計画

平成29年9月～平成30年2月の間に、月1～2回の訪問活動を行ない、農林家（生産者）と家庭料理の調理人としての住民と共に食のワークショップを継続的に開催する（9月は予備調査）。平成29年12月には、日本で最も美しい村連合の副資格委員長（品質管理・地域資源開発が専門）を招いた住民学習会を実施する。

##### (2) A：当初想定していた予定を上回る成果が得られた。

### (3) 実績・成果

今年度の研究を開始するにあたり、2017/9/19に川根本町役場で打ち合わせを行った。食の魅力を発掘する際に、住民の情報発信力が弱いとの指摘があった。来訪者の情報発信力を高めることはもちろんだが（よそ者の目、学生の実践）、住民自らが、地域資源を発見し、磨き上げる実践をいかにパッケージ化して発信していくか（日常の発見と喜びの共有）。住民の日常の発見と発信をどのように促し、いかにして情報ネットワークのなかに有機的に位置づけられるのか。このような問いを手がかりに考えていくことにした。

代表者が担当する農村資源計画学は、「地域資源を見つけるまなざしを鍛え、磨く方法を習得する」ことが目標であり、以下のような学習内容を組み立てている講義である。農山村コミュニティの自治と持続性を構築するうえで必要となる、地域資源の保全・活用・開発に関する基本的考え方を獲得し、計画論の手法や技術を習得する。なかでも、再生可能資源（自然エネルギー）とコミュニティ、農と食をテーマに、具体事例を検討しながら、その計画策定、地域主体の形成、事業・政策評価、ネットワーキングの方法を社会実験しながら習得する。

そこで、「川根本町にある農と食の地域づくりを発信する（あるものさがし）」をテーマに、受講生22名を5つのプロジェクトチームに編成し、それぞれのチームで（1）食との出会いを情報にして発信していく、（2）情報の流れをモニタリングし、（3）分析と改善策を提案することを課題とした。

プロジェクト共通のハッシュタグとして「#かわねのne」を考案し、さらにチーム名をハッシュタグとして設定した（「#ゆずのいいとこゆずっちゃんお」、「#チームBIG」、「#川根ポップー」、「#川根いいものがち勢」、「#かわ姉さんやんばいです」）。収集した記録はSNS情報として加工し、現在も流通を続けている。報告会当日は、それまでの時点での情報流通の分析結果を報告する。

### (4) 今後の改善点や対策

今回は初年度の立ち上げとして、それぞれのグループの自由度を高め、学生にはSNSツールを利用した社会実験的取り組みを数多くこなしてもらった。「地域の宝」を「発見する」とことと、それを様々なツールによって「磨く」ためにフィールドワークに通い、さまざまな交流を通して学生たちの素直な感想や魅力を発信するという「みつめるまなざし」を鍛え上げることができた。その一方で、地域住民に川根本町のリソースを認識してもらう機会は十分につくることができなかった。

今後は、フィールドワークやSNSツールを利用するなかで、得られたデータからテーマをさらに発展させ、外に向けた単なる観光地化ではなく、地域住民の方々へフィードバックし、地域リソースを媒介に川根本町と学生のちからを相互に発展させたい。フィールドワーク、実践、地域住民の方に向けた成果発表のサイクルをつくり、川根高校へ「川根留学」をしている高校生とも交流を図り、地域への愛着を深める取り組み等を行っていくことも考えたい。

## 5. 地域への提言

地域の中にいると気付けない「当たり前」のもの、「そんな特別なものじゃないよ」と思っている日常のものが、外から見たときには非常にユニークな土地性の表象であり、魅力あるものであることを楽しんでもらいたい。無理に新しいものをつくったり、手を加えたりする必要はなく、そのままのものをどのように「地域の宝」としてみつめ、磨き、外へ向けて発信していくのか。そのことで得られるフィードバックを個人ではなくチームで受けとめることはできないか。同町が推進する千年の学校や住民ディレクター養成講座、美しい茶園でつながるプロジェクト（#つながる川根茶）など現在の活動とも共鳴しあいながら、なつかしさ、あたたかさを強みに変えていくことができないか。「今あるものを新しく、同じものを違う視点で」、という考え方で、これからも共にプロジェクトを進めていきたい。

## 6. 地域からの評価

新しいものを生み出すことが住民の皆さんの総意によって行われ、誰もが関係者として愛着をもつことができるよう、相互に意見を交換したい。そのなかに、学生という外部の要素が入ることは（一先ず出会った限りでは）非常に歓迎している。回数的一面でも業種的一面でも川根本町と学生のいろいろな人同士が交流し、つながりが生まれたことはたいへん財産になったと聞いた。学生たちだけでなく、住民の皆さんにとっても、よろこびや気づきになった部分があるように思う。川根本町として、これから長く深い付き合いになる足掛かり、きっかけとして大きな成果であったと聞いた。今回スタートした取り組みの成果を単年度ではかるのではなく、中長期的な目線で、これからのことを考えていきたいということであった。今後の継続的な取り組みが大いに期待されている。